

能楽の楽しみ

評議員 佐藤 禎一

日頃研究三昧の皆様、能楽の楽しみをご紹介します。文学、歌舞、歴史などを背景にした古来の名作は、視野を広げ、未使用の脳の部分を活性化させますが、さらに幾ばくかの時間をその実践に使われれば、健康の増進に貢献する優れものです。

能楽（能と狂言の総称）は、田楽や猿楽を継承・発展させたもので、特に能については、室町時代、三代将軍の義満、四代義持の庇護のもと、観阿弥・世阿弥の活躍により、芸術性を高め、今日まで伝承される多くの名曲を完成させました。

能は、シテを中心に、ワキ、ツレなどが舞を伴う

演技を進めますが、^ジ地と呼ばれるコーラスと、太

鼓・大鼓・小鼓・笛の囃子方で構成されています。（雛祭りの五人囃子はこの順に並

んでいます。）基本的には、シテは^{オモテ}面と呼ばれる仮面を着け、ワキはしばしば観客を代表するかのごとき傍観者の役割をいたします。ギリシャ劇の構成と似た演出形態を持っていると言われることがある所以です。

能の発展には、観阿弥の活躍が大きなきっかけを作りましたが、世阿弥の時代に複式夢幻能という形態を完成させることにより、さらに飛躍いたしました。（世阿弥は数々の名曲を創作し、風姿花伝、花鏡などの理論書も残していますが、後年は佐渡で過ごすなど、その人生の全容は分かっていません。）前場でワキが老人や里女などと出会い、様々な物語を聞きますが、実は自分がその物語の主人公なのだと思われ、中入りし（シテは一旦、橋掛かりから幕に消えます）、狂言方がその物語の補完をしている間に扮装を整え、後場では男女の神様や武将、小野小町などの主人公の本性を現し、様々な舞や働きを見せるという二部構成とする演出方法です。後場は概ね夢の中の出来事と思われませんが、やがて余韻を残して終わりを迎えることとなります。この演出が主流ではありますが、中入りの無い演目もあり、後場だけが人気を博し、中入り後のみしか演じられないこととなったものなど、700年の間に、いろいろな角度から検証され、今日の演出にたどり着いているものです。

能のジャンルとしては、能にして能にあらずとされる「翁」は別格とし、^{シン ナン}神・男・

^{ニョ キョウ キ}女・狂・鬼の5つに分類されています。私の若い頃は、観能会といえば、この五番立てで、一日がかりでしたが、この頃は、お昼だけや夜だけの公演も多くなり、番



数も少なくなりましたが、演目は上記の五番立ての順番に演じられます。このうち、優美な女性が主人公となる「女」のジャンルは、三番目物あるいは鬘物と呼ばれ、序ノ舞などのゆったりしたリズムの舞を伴い、幽玄の世界を表現し、じっくりと鑑賞すると実に多くのことが感得されますが、フランスの文化大臣だったアンドレ・マルローをして、「死ぬほど退屈だった」と言わしめたものでもあります。かたや、大正の終わりから昭和の初めまで駐日フランス大使を務めたポール・クローデル(20世紀前半のフランスの最も優れた作家と言われました)のように能を深く理解し、新作能まで作ってしまった人もいます。

ここで一曲覗いてみましょう。二番目物の「清経」です。世阿弥作のこの曲は、太平記および関連流布本から曲想を得ているようです。今日人気のある曲は、平家物語に由来するものが多いようです。室町時代からみれば200年前の出来事であり、年を経たもののまだ生々しい記憶に残る多くの出来事は、多くの人にも分かりやすかったのでしょう。対して、先の三番目物の多くは平安時代の物語ですが、これはもはや遠い昔で、人口に膾炙された日本や中国の古典文学を典拠にしており、いわば当時の人々に共有された一般教養が下敷きになっていると言えそうです。

平清経は、重盛の三男で、平家の敗色が濃くなった折節、宇佐神宮のご加護を得られず、世を儚んで豊前国柳ヶ浦で入水して果ててしまいました。

能では、清経の手下のもの(ワキ)が、都に住む、清経の妻(ツレ)を訪れ、入水の旨を伝え、形見の黒髪を届けます。ツレは、清経を偲びながらも、その行動に納得せず、形見の髪を返してしまいます。悲しさ、恨めしさ、恋しさを込めた複雑な心境のもとでまどろむうちに、清経(シテ)が登場します。

この曲は、複式夢幻能ながら、中入りは無く、ワキは静かに退場し、シテとツレの対話に転換するという珍しい形ですが、効果的な演出となっています。また、恋ネトリの音取という特殊演出(小書)コガキとなりますと、笛方の重い習いである情緒豊かな笛の音に引かれてシテが登場します。このシテと笛方の緊張関係は刮目に値するものです。

能の世界には絶対的な音の高さや絶対的なテンポは無く、また、指揮者もいません。一応、シテが中心になるものであり、地謡には地頭というリーダーがいます。また、囃子方の中でも、約束事がりますが、舞う人、謡う人、囃す人が、互いに見計らいながら全体の調和を取り、曲想を完成させていきます。この点では西洋音楽の世界とは大きな違いがあると言えそうです。

夢の中の清経は、行動をなじる妻に対し、平家軍の敗走の様子や宇佐神宮での神勅に落胆した有様などを延べ、自身の最後を物語ります。やがて、修羅物らしく勇壮な場面展開となりますが、最後は成仏し、静かに消えていきます。このような簡単な紹介では、この曲の良さは伝えられません。是非とも機会をみて美しい詞章を味わってみられることをお勧めいたします。

二番目物の本曲をご紹介したのは、この曲が名曲であるということもありますが、私が、この曲の舞台となった柳ヶ浦のある大分が故郷であるというご縁からでもあります。ちなみに、大分では、清経の上演は遠慮されております。「うさに八神も亡

きものを」という詞章がある事への配慮でしょうか。

正座し（最近では姿勢を正し、椅子に架けて謡う事も多くなりました。）、大きな声を発することは、物理的にも精神的にも良い事が多いそうで、古来、謡十徳とも言われています。一生手軽に楽しめる趣味としてお加えになると、きっと良い事があるでしょう。

元ユネスコ大使